「あかいじどうしゃ」

美音羅

「あかいじどうしゃ」

　広島に住んでいた幼稚園の頃、先生が私のために描いてくれた「あかいじどうしゃ」という手作りの絵本が印象に残っている。
　小さい頃の私は病気がちで幼稚園を休んでばかりいて、みんなと一緒にお遊戯が出来ず、教室の隅でじっと積み木をしたり、本を読んでいることの多い子供だった。そんな時、幼稚園の先生が、クルマ好きだった私のために自動車の絵本を描いてくれた。
　画用紙を半分に折り、ホッチキスで止めただけの１０ページにも満たない簡単な絵本。主人公の自動車は、広島カープが好きだった先生の影響で、赤い色鉛筆で描かれていた。
　ページを開くと、赤い自動車は元気一杯。太陽を浴びながら町を抜け、山を越え、川を渡り、沢山のガソリンを入れ、満天の星空、ライトを照らして走る。そして、海へ出る。青空の下、海を走る赤い自動車。
　あっという間に読み終えると、先生が心配そうに
「どう？」
と言って私の顔を覗き込む。とても上手とは言えない絵。思わず子供の無邪気さで
「せんせい、え、へたっぴ」
と言い、先生を苦笑いさせてしまったが、毎日毎日飽きもせず、繰り返し教室で読む私の姿に、先生も、私の本心を理解してくれていただろう。
　先生が私にくれた、大切で、大好きで、繰り返し読みたくなる、ラブレターのような絵本。
　一度、私だけにそんな絵本を描いたことに嫉妬した男の子と取り合いになり、「あかいじどうしゃ」は激しく破れたが、先生の手によって補修され、「みんなでよもうね」というルールで、戻ってきた。
　それからしばらくし、私は父の仕事の都合で東京へ行くことになったが、その、手垢がつき、くたびれた絵本は、取り合いになった男の子と握手をし、記念にプレゼントしてもらった。
　やがて成長していくにつれ、そんな、大好きだった幼稚園の先生との交流もなくなり、沢山いた広島の友達の顔も名前も思い出せなくなった。そしてあれだけ大切に、繰り返し読んできた「あかいじどうしゃ」も、いつの間にやら失くなってしまい、もう、手元にはない。
　しかし私は、大人になった今も、あのボロボロになった絵本が忘れられない。あの一冊には確かに、人を励まし、喜ばせようと、人を想う気持ちがあった。そして、その気持ちを満載にしたあの「あかいじどうしゃ」は、私の知らないうちに絵本を飛び出して私の体に入り込み、今でも元気一杯、走り回っていると私には感じられるのだ。